田中 十九三

暘

田中十九三

暘

句集　暘　参百部限定版奥附
平成三年十一月三日発行

著作者　田中十九三
埼玉県川口市朝日一―一―二七
電話　〇四八二(二二)三二八四

印刷所　亀田印刷株式会社
埼玉県川口市本町三―六―九

領価　四、〇〇〇円

句集・暘・目次

作品

第一章　1
第二章　65
第三章　129
第四章　193
第五章　257
第六章　321
既刊句集　388

第一章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大枯野素寒貧の顔がくる
隙間風写楽の顔となることも
主婦の座のどっしりとある冬座敷
勝独楽は満身創痍かも知れぬ
補聴器で聞く木枯しや晩年期
冬の蝶音なく消えてゆくさだめ
何事もなくて麦踏む老夫婦
昭和史はすでに過去なり冬木立
冬ざれや働くほかは知らぬひと
十二月の漬物石のような母
旅人の前もうしろも冬景色
木枯しの村を少年出るつもり
速足になれば汗ばむ冬帽子
麦を踏みいろいろなこと考える
快速車過ぎれば枯野に戻りけり
木枯しに吹きさらされて兵の墓
好きな人いるかも知れぬ雪女郎
雪女動脈硬化していたり
日雇婦のようなくせあり雪女
ふたたびは逢えぬかも知れぬ雪女

鮟鱇の吊るされている真昼間
大きすぎて漬物石になり切れず
母の忌や冬木一本真すぐ立つ
昭和史の幕降りてから餅を焼く
ジーパンの似合う女が芹を摘む
山茶花は小さく咲いて愛される
子が九九を空じ正月見えてくる
憾手していて考え過ぎるかな
真冬なを素足でいるや雪女
人参を煮ているだけの喪の女
埋火は明日へつなぐ恋心
過去一つ残して消えた雪女
雪女の足跡ついに無かりけり
空戒張りしているだけか冬鴉
漬物石忙がしくなる歳の暮
雪女だんだん人間くさくなる
兵の墓ぽつんと一基冬銀河
冬木立のようなこの世か生者死者
人死んで雪はなぬめに降るばかり
枯野には枯野の貌のある不思議

冬されてゆつくり話し合うことも
何処よりも早く故里冬景色
冬蝶はいつも孤独のようにいる
こがらしに枯色どつときたりけり
枯木立人は俄に死ぬ日あり
空つ風故里人は声あげず
冬されや振り向く距離に父と母
故里の山から先に木枯しくる
一本の杭が境となる枯野
木枯しや女が先に老いゆけり
少し血が増え十二月八日くる
十二月八日の寒い兵の墓
冬を越すために玉葱吊るさるる
小春日の胎内透けてくることも
冬されて口重くなる京女
十二月着せ替え人形買わさるる
冬されや悪役ばかりに徹しおり
川風をもて余したる十二月
空つ風吹くたび遠くなる母郷
不意にくる死神冬が厳しすぎ

補聴器をかかて内緒話し聞く
しなやかな指から先にこごえけり
山門をくぐれば寒い仏たち
冬菊のように冷めたい仏たち
干柿の甘い匂いのなかにいる
懐手したまま噂聞いている
いくたびも雪降り明日が見えてくる
頬かむりしたまま耕している農夫
寒風にさらされている石仏
耕転機に埃のたまる冬日和
寒風に向い己の意志通す
長湯して落葉の音を聞いている
股火鉢しているだけか出稼夫
いろいろな噂聞える日向ぼこ
無器用な生き方もあり寒たまご
寒椿咲いては風にさからわず
冬そうび女ますますさからえり
熱燗で明日への夢かたりあう
寒風の吹き抜け誰もいない駅
冬そうび昭和の終り見届けて

万歩計枯野を抜けてゆくことも
枯野ゆく少しはなれて僧もいる
焚火して噂話しを聞いている
枯れはてて主役のいない村芝居
温め酒呑んで旧交あたためる
石切場寒の鴉が鳴きにくる
死ぬまでの時間まだあり大枯野
紙漉女どこか似ている仏の瞳
枯山が好きで鶏は啼きにゆく
手持無沙汰な女がひとり花八つ手
枯色のなかに一本冬ざくら
枯色に染まりし村に無人駅
ためらわず枯野いつきに抜けてくる
十二月の秘境に言葉おいてくる
冬ざくらの奥は浄土かも知れぬ
枯色になるまで村にとどまれり
枯れ切つて村も写楽の顔になる
冬ざれや浄土へつなぐ電話欲し
焚火するいつもの距離に妻がいて
紙漉女指の先からこごえけり

年金暮しの男につらき冬の蝶
噂生むこともありけり大焚火
着ぶくれて締め切つている顔も
枯野ゆくときは丸腰の方がいい
裸木になれば野猿も寄つてくる
寒風にキリンの首が渇きけり
干柿が白い粉をふく日和かな
生き下手は黙つていたり大焚火
大方は冬の木となる雑木山
裸木が一本余罪あるごとく
赤字線枯野にとり残されている
裸木になるまで燃える大銀杏
昭和史振り返り見る余寒かな
冬ざれて首の骨なる晩年期
大枯野ゆく葬列と夕がらす
十二月の風が男をたかぶらす
なかまど焚かねば春はこぬものを
霜柱踏んでも踏んでも父の国
冬ざれや夫婦に時効なかりけり
裸木にならねば春は見えて来ず

冬ざれて蝶もいちにち動かざり
枯野ゆく旅人孤独かも知れぬ
寒風にあがる火の声水の声
丸腰でゆかねばならず大枯野
ラストシーンとなるまで枯野歩きけり
大枯野でつかい夕陽見えてくる
長すぎるキリンの首も冬ざるる
売る牛を曳いて枯野を抜けてくる
よく見れば梵字のような冬木たち
生きていることにも意味あり冬ざくら
寒風にこごえているは蝶ならむ
二人いてふたりが寡黙となる寒夜
おんなの終りくるかも知れぬ霜月夜
裸木になつても芯はもえている
黒枠のなかの少年兵も冬
唐辛子夕日に映えているごとく
消印のないハガキ一枚冬ざるる
温め酒呑んでも心は飢えている
あいまいな生きざま冬が厳しくなる
縄文の壷寒風にさらしおく

供えたる水凍てついている師走
冬海の濤あらあらし裏日本
時雨るるや女にもある尾骶骨
枯木立敵も味方も透けて見ゆ
憎しみもだんだん薄れてくる師走
十二月一日おきにくる寒気
水底に大魚もいたり十二月
置炬燵写楽の謎を聞いている
寒風に津軽言葉がとびかえる
旅人の襟足寒き津軽の冬
大股に歩けば日本海も冬
熱燗で酔えば不思議な夢を見る
老いてなお意地張っている冬椿
故里の使がさむい十二月
師走の街赤提灯が目立ちけり
碧眼の女がひとり寒椿
さまざまな生き方ありて一葉忌
生きている只それだけか寒雀
干柿の甘味が増えてくる寒さ
刃物研ぐ指先こごえてくる師走

嘘のない裸木鴉も寄つてくる
晴れた日は寒の鴉も啼きにくる
短日の部屋いつぱいに遊ぶ子ら
とぎれとぎれの夢を見ている冬の蝶
雪吊りの松うつくしと思いけり
冬木立風きてなおも寡黙なる
水涸れて川は底までさらけ出す
冬の月どこかがずれているふたり
吉凶は知らず枯野のなかにいる
柚の湯に浸り明日を考える
枯れ切つてしまえば言葉欲しくなる
冬の蝶薬師如来の手のひらに
石投げてみても所詮は冬木立
うながされ発つほかは無き冬の旅
手のひらに温み残れり冬ざくら
枯れ深くなりて鴉も啼けるなり
日の匂い残る枯野にいてひとり
忘れたいこと一つあり冬そうび
淋しくて冬枯れの街歩きけり
日向ぼこしていて明日を考えず

極まれば枯野に音のない不思議
振り返る距離に枯野はひろがれり
水鳥の羽ばたきを聞く日暮れどき
冬そうび傷付き易すき少女期
雪の舞う街をひとりの蛇の目傘
ぢやんけんの石は枯野においてくる
蓮の葉の枯れて浄土が遠くなる
牡蠣フライ食べて日暮れの街にいる
裸木になれば明るい雑木山
歳末の街は女ばかりかも
戦さなき海で水鳥あらそえり
白壁の街を寒風吹き抜ける
寒風にキリンは首をもて余す
十二月別れの喪服着ることも
太陽の光あふれて冬木立
裸木のひと枝ごとにある温み
石投げてみてもせんなし冬怒濤
風にのる凧の一つは村越える
糸口がつかめぬままに椿落つ
極まれば枯野に残る日の匂い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

枯野から枯野へ鳥のごときもの
枯野ゆくときも漂々と山頭火
冬ざれや女に多き自己主張
飢えている狼のよう吹雪きけり
少年の夢とは別に冬銀河
頓服が効いて真赤な顔でいる
冬山を遠く見ている知らぬ人
女が先にくるかも知れぬ枯野径
ぼんやりとしているだけか冬の蝶
冬山を登るに声をあげており
風花のあとは日暮れの風となる
どの顔もおだやかになり屠蘇をくむ
大方の女に似合う冬帽子
はるかよりはるかえ年の初めなる
他人ばかり増えて正月らしからず
はるかなるものえ憧れ冬椿
時差ぼけの男がひとり冬そうび
生きているだけの暮しか花八つ手
限りあるいのち大事に餅を焼く
月光に影が重たい花八つ手

いやなこと忘れていたり花八つ手
寒い日は寒い顔して凡夫たり
靴音の凍ついている夜の刻
十二月つかずはなれずいるふたり
冬岬まぢかに迫る濤の音
はるかなる声をあつめて冬怒濤
すべてのものがピリオドを打つ師走
初夢を見ることもなき晩年期
白鳥がきている湖のひろきかな
霜柱踏んで尋ねる人はなし
柚子の湯に浸りすべてを忘れおり
どことなく淋しい顔でいる師走
寒林をゆけば明日が見えてくる
十二月の風が懐抜けてゆく
平凡な男ばかりか寒の月
枯野ゆく旅人だからあたたかし
思うようにいかぬこの世を返り花
少年の夢がひろがる冬怒濤
晩年は風の速さでくる師走
河豚鍋を囲み過去を忘れおり

枯色も保護色なりき鳥けもの
紙を漉く女は持たぬ二枚舌
空つ風の行き止りなるビルの街
農継がぬ子もいて冬は枯色に
冬ざくらの花盛りなり喪の家も
冬の日がはみ出している紙漉く村
枯色になつて蟷螂息たえて
朝市に冬の温みのくる時間
寒風に胎内燃えてくることも
狐火が見える暗がりにいてひとり
持ち時間まだ少しあり冬そうび
しなやかな冬木の枝を探しけり
日向ぼこ明るい顔となることも
枯野ゆくときも油断はゆるされず
北風が音立てている雑木山
雪降れば恋しくなつてくる母郷
木枯しがくる住み馴れぬ村にいて
熱燗でなぐさめあつているふたり
水涸れて大河みにくきものさらす
枯野ゆく旅は僧とも尼僧とも

廻り道して寒風を避けてゆく
肩書きも無くて一日冬ざるる
肩張つて空つ風吹く街をゆく
かたくなな男もいたり冬銀河
枯野まで夢を探しにゆく愚か
枯れ果てて神にも仏にも見放さる
落葉焚くけむりのなかにいてひとり
日向ぼこ女を無知にしてしまう
空つ風少年体軽るくして
冬蝶のいのち絶えると思える日
空つ風手足ばらばらになる寒さ
鮟鱇を八つ裂にして真昼間
うら街の薄暗がりや一葉忌
枯野ゆくときも優しさ失なわず
寒風にひとりは写楽の顔でいる
暗闇のなかでも匂う冬そうび
化粧することは忘れず冬紅葉
振り返つてみても温もりのない枯野
冬野ゆく小さな悔を胸に秘め
いつまでのいのち木枯しのなかにいて

枯木立のなかにも温み残りけり
切株も雪に埋ずもる日となれり
人のこぬ枯野へ言葉おいてくる
人去りし石切り場から冬ざるる
冬山へ鴉は仲間呼びにゆく
古いかたちの女ばかりか一葉忌
敗残兵のように木の葉が逃げてゆく
暮れの街兵の歩幅で歩きけり
冬木立鴉矢鱈に増えている
十二月厠一けん建てられる
裸木はどれも鴉の遊び場か
電柱も枯木の一つか啼く鴉
過疎村は女ばかりとなる真冬
いくにんかの僧と出あえり大枯野
柚子の湯にゆつくり浸つている晩年
枯れ切つてしまえば温みわいてくる
かすかなる陽をあびている冬そうび
枯葉まだ残る大木見ていたり
どつち向いても冬木のような人ばかり
牡丹雪すべての音を消して降る

故里に凧あげる空まだありぬ
ふだん着の女ばかりか冬の街
ふたりだけの暮しのなかの隙間風
春近き枯野足裏疼いてくる
枯山を叩いて記憶とり戻す
冬の蝶いのち果てるを知らずいる
頬かむりしていて寒い顔でいる
八つ裂になるかも知れぬ大鮟鱇
喪の女のように冬木が立つている
冬景色銭入れ覗く遠眼鏡
煮凝りのふるえ明日が知りたくて
音たてて急行列車のゆく枯野
妻の座のどつしりとある冬座敷
懐手していて女かも知れぬ
雪降るやすべての過去が埋ずもるる
彼もまた過去の人なり花八つ手
どう向をかえても雪はなめに降る
きびしさを全身にうけ寒椿
囲炉の火とろりと眠くなる齢
どこからも見えて藁塚たそがるる

枯れ切つてしまえば全てが過去となる
熱燗で女の嘘を聞くことも
話す相手のいない独りの根深汁
耕転機が音立ててくる枯野径
水涸れて大河の過去が見えてくる
どっしりと藁屋一軒冬景色
寒椿女が意地を張り通す
寒椿女もかたい顔でいる
牡丹雪一つの過去を残しけり
十二月八日の長い夢を見る
雪の山見ているだけで寒くなる
さまざまなことに出あえり冬銀河
寒卵一つのいのち大事にす
寒風にさらされ兵の墓一基
音もなく流れて芹の水となる
雪女に過去も未来もなかりけり
枯れ切つてしまえば幸せかも知れぬ
ビル街の向うに雪の富士がある
寒卵どれも孤独の顔でいる
生きている只それだけか冬の蝶

熱燗で明日のことを忘すれおり
日向ぼこしていて故里遠くいる
夫婦かもつかずはなれず麦を踏む
四代を生きて炬燵のなかにいる
母子寮の窓につめたい冬の月
ままならぬことのみ多く寒椿
寒卵ころがることは許されず
寒林も言葉が欲しい夜の刻
戸を叩く音もつめたき十二月
生あれば良きことあらむ冬そうび
水涸れて水の匂いでくる尼僧
寒の月つめたい女ばかりいて
温みまだ残る枯野にきていたり
冬山を登る明日へ夢つなぎ
ポケットの中で小銭の鳴る寒さ
柚子の湯で肩の力が抜けてくる
冬夕焼け鴉一羽が啼きにゆく
鋤鍬を洗う正月くるからは
温みある言葉が欲しい寒椿
冬山は男の修羅場かも知れぬ

一言が欲しい日暮れの枯木立
晩婚のふたりも師走の街にいて
冬ざれて言葉が欲しくなる大野
鶏はいつも素足で冬夕焼
しなやかな指が障子を貼りかえる
村中が枯色となる師走
さよならを言い忘れたる枯野径
枯色になるまで村にとどまれり
悪役が似合うおとこの冬帽子
冬そうび独りでいたい時もあり
しなやかな指もしもやけ暮しの手
心にも無いことを云つている師走
冬そうび少女を可憐にしてしまう
欲深き顔もならんでいる師走
入口も出口も枯れている大野
隙間風女を無情にしてしまう
墓ばかり増えて出稼ぎ村は冬
寒風がふたりを消しにくることも
どこよりも早く過疎村冬に入る
誰にでも死はくるものを冬そうび

やすらぎを求めて枯野さまよえり
寒卵ぽつんと転ろげることもなく
喪の家の元日誰も来ず暮るる
絵のような景色雪降るあしたかな
千の手が皆こごえそうな大寒波
裸木に小鳥も気易く鳴きにくる
寒椿厳しき音をたてて落つ
先の見えぬ不安あるなり寒椿
いちにちを気儘に生きて椿落つ
花八つ手何かを隠くしているごとく
花八つ手風に温みの残りけり
海鳴りを遠くに凧のあげており
茶山花の淋しき匂いうたがわず
風花はためらうごとく手に触るる
枯色になるまで生きているつもり
風花のような生き方老後とは
死神がちらりと見えて花八つ手
眼の色がかわる寒風にさらされて
枯れ切つてしまえば死神見えてくる
花八つ手謎の一つが解けてくる

振り返る距離に枯色ひろごれり
冬ざれや素焼きの壷を買いにゆく
吹き抜ける風がつめたい零番地
寒すぎる昼は真赤な帽子買う
地下道へつづく道なり冬帽子
地下道を出れば師走の街がある
村中が枯色となり夕鴉
故里の山に枯色どつときて
越後から刃物売りくる十二月
十二月振り向く距離に妻がいて
冬ざくら夕日に染まることもなく
友死んでとり残されている師走
ひとりで行けばつかみどころのない枯野
北風をまともに意地を張り通す
襟立てて北風の街歩きけり
北国はどこも枯色たそがるる
山河みな枯れてつめたい裏日本
蛤の口あけている海のはて
十二月八日の寒い村にいる
唐辛子吊るされていて夕焼ける

ひのえうまの女がひとり一葉忌
人声の遠くなりたり冬そうび
欲のない顔が熱燗呑みにゆく
十二月しまらぬ顔でいる男
首を吊ることも遊びか冬木立
回転ドアぐるりと冬がきていたり
多感期の少年といて冬の月
野仏もならんでいたり枯野径
挫折感あるかも知れぬ冬の蝶
枯色に染まりきれない喪の女
落葉のまんなかにいて詩人なり
おでん酒呑んでみのりのない男
冬満月ひとりはとろりと眠くなる
父と子に少し距離あり冬銀河
どこからも見えてつめたい冬銀河
正月が見えて障子も貼り替る
吹き抜ける風も身軽るな冬木立
浅草の灯が消え冬が深くなる
よく見ればどこか疲れている冬木
枯れ切つていても女は意地を張る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com